解　題

昨秋、日本学術振興会の招きではじめて来日されたアンドレ・ギュイヨー氏は、１０月１５日から３１日までの滞在期間中に、東京、京都、郡山で計四回の講演、セミナーを行なわれた。ここに掲載される「ボードレールと十九世紀の精神」と題したテクストは、１０月１８日午後五時より、東京大学文学部法文一号館２１５番教室において、セミナー形式で開催された同題の講演の原稿に、氏自身が若干の加筆修正を施したものである。

１９７０年代末から気鋭のランボー学者として知られるようになったギュイヨー氏は、１９５１年、ベルギーのナミュール市近郊に生まれ、ブリュッセル大学とパリのエコール・ノルマルで研鑽を積まれた。その後、フランソワ・ラブレー大学（トゥール市）講師、オート・アルザス大学（ミュルーズ市）教授をへて、１９９４年にソルボンヌ（パリⅣ）の教授に就任された。

氏の業績のなかで第一に挙げるべきは、１９８１年の国家博士号取得論文を基盤に、８５年にスイスのバコニエール書店から出版された著書 *Poétique du fragment. Essai sur les* Illuminations *de Rimbaud*、およびそれと対をなす『イリュミナシオン』批評注釈版 Arthur Rimbaud, *Illuminations*. Texte établi et commenté par André Guyaux である。アルベール・アンリ教授の薫陶によるベルギー文献学の堅固な方法と構造主義以降の新しいアプローチとを、総合的に駆使しての成果であるこれら二巻は、ランボーの散文詩集成立をめぐる認識を飛躍的に深めるとともに、個々のテクストの読みを豊かにすることに貢献した。従来ともすれば思弁性と抽象性の袋小路に陥りがちであったランボー研究に、具体的で奥行きのある、新しい道を開いたのである。ランボー関係ではこのほか、*Duplicités de Rimbaud*、*Bibliographie des* Illuminations の二著（ともに１９９１年

Champion-Slatkine 刊、後者はオリヴィエ・ヴィヴォールとの共著)、シュザンヌ・ベルナール編注のガルニエ古典叢書『ランボー』の改訂新版（１９８１年以後四版を重ねる）、『カイエ・ド・レルヌ／ランボー』（１９９３）の編集などを手がけられている。

氏の研究領域はもちろんランボーに限られるものではなく、ボードレール、ユイスマンス、ミュッセ、サント・ブーヴをはじめとして、ロマン主義から象徴主義に至る十九世紀文学の広い範囲にわたる。フォリオ叢書の Baudelaire, *Fusées. Mon coeur mis à nu. La Pauvre Belgique* の批評注釈版（１９８６）、論集 *Dix Etudes sur Baudelaire* （Champion, １９９３）の編集、十九世紀におけるミュッセ受容を跡付けるためのテクストを集めた *Alfred Musset* (Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, Coll. Mémoire de la critique, １９９５）などの仕事がある。今回の滞在中、「ランボーと限界の弁え」“Rimbaud et le sens des limites”（２８日、郡山市での日本フランス語フランス文学会秋季大会での開会講演）のほかに、本学と京都大学（２３日）でのセミナーにはボードレールが、また東京日仏学院での講演（１９日)には「ユイスマンス『さかしま』におけるイロニー」“Huysmans, *A rebours*, et l'ironie”という題目が選ばれたのは、ランボー以外のことも話したいという講演者自身の意向と日本側の希望とが合致したためである。

ギュイヨー氏は、ボードレールをめぐるセミナーでは、本稿に読まれるとおり、『赤裸の心（内面の日記）』や『悪の華』第二・第三版のための「まえがき」の反故草稿といった、まともに扱われることの少ないテクストの読解を通して、同時代の政治家、大衆、文壇ジャーナリズムの俗物性を前に焦燥する詩人の矜恃と絶望を鮮明に描き出し、ユイスマンスに関する講演では、頽廃と倒錯のデカダンス趣味の典型として読まれる『さかしま』の裏に潜む「イロニー」を取り出して、この作家の残酷な明晰さとでもいうべき面を明

らかにした。さらに、ランボーをめぐる講演では、一つの詩形式から他の詩形式へ、文学の世界から非‐文学の世界へ、苦もなく移って行ったと見られがちなこの詩人のなかに、更新の力に抗する保持の力がつねに働いており、両者の葛藤こそが独特のポエジーの源泉になっている点を強調された。

通念を挑発し転倒する要素を多分に含むこれらの発表は、おのずと数多くの質問や議論を触発し、筆者が立ち会えなかった京都でのセミナーを含めて、いずれも活発な、密度の高い集まりとなった。ギュイヨー氏は、講演前後の談論や懇親会の場でも、その飾らない人柄で日本人研究者や学生と広く接された。すでに優れた業績があり、さらなる飛躍の可能性をもつ比較的若い研究者を招く目的で発案されたこのたびのギュイヨー氏招聘が、今後、研究・教育両面でいっそう充実した交流の基盤となることを期待したい。

中地　義和